

## お母さんは魔女

滋賀県 栗東市立大宝東小学校 四年

河嶋 暁雅<sup>かわしま おうが</sup>

「はいメガネ。洗面所に放つたらかしやつたで。」  
「今日、工作の材料持っていくんやろ？ 玄関にまとめて置いていたしな。」

などなど。ぼくはお母さんから、毎日こんなことを言われている。ぼくのお母さんは、どうやらぼくの心が読めるらしいのだ。ぼくは何も言っていないのに、今ぼくがしようとしていることが全部わかってしまう。お母さんの頭の中は、一体どうなっているのだろうか。

ぼくのお母さんはいそがしい。毎日家のことを一人ですながら、仕事を二つかけもちしている。いつも、

「あ、もうこんな時間。全然間に合わへん。」

と言いながらギリギリで出ていって、夜おそく帰ってくる。そんなにいそがしいのに、いつ子どもたちのことをしているんだろ。三人分の持ち物全部に名前をつけたり、ズボンのすそを直したり、ユニフォームにゼッケンをつけてくれたり。どれだけ時間があっても足りないと思う。

そこで、ぼくは考えた。お母さんはきつと魔女なのだ。そうでなければ、ぼくの今ほしい物がピンポイントでわかったり、ぼくがどんなにさがしても見つけられなかった物をいっしゅんで見つけたりできるわけがない。それに、お母さんはぼくが言おうとしていることをすぐさっ知して

「それって、こういうこと？」

と言いついてくれる。自分でうまく言えなくてたぶん伝わらな

いだらうなあと思つてお母さんには見事に別の言葉に置きかえて的確な文章にしてくれるのだ。お母さんの理力半ばない。ぼくが

「なんでそんなに何でもわかるん？」

と聞いてみたら、お母さんは笑いながら

「ママは、おうちさんのママやから。」

と答えた。なんやそれ。さっぱりわからないので、

「何してる時が一番幸せ？」

と聞いてみた。返ってきた答えは、

「お布団でゴロゴロしながら、おうちさんにスリスリしてる時。」  
だった。ちよつとはずかしい。でも、お母さんがぼくのことを好きで好きで仕方ないことはわかる。お母さんの魔女パワーのもと、ぼくは、そこのかなあ。

魔女の息子のぼくはというと、片付けも苦手、お手伝いも言われないうえ、このままでは魔法使いになれない。ぼくも、毎日やるべきことをきちんとやって、もう少し人の気持ちを考えて行動できるようにになりたいと思う。魔女を見習って、魔法使いになる修行をしてみようかな。それでもし本当に魔法使いになれば、お母さんに一番幸せな時間を無限にプレゼントしてあげたい。でも、それだと遠い先の話になってしまいそうなので、まずは毎日、

「ママ大好き。ママありがと。」

と言いついてから始めたい。